

二〇一四年一月一日

佐藤 勝

## 1 きつき城下町資料館

市ではこれまで歴史のまちづくり事業として、北台武家屋敷を中心として、旧家老屋敷大原邸を買収し、寄贈された磯矢邸、藩校の門、石畳の坂道、土塀などの修理修復を行ってきた。

そして平成元年（一九八九）、南台地区の武家屋敷群のなかに用地を取得し、城下町資料館と歴史公園を建設することになった。市内に点在する文化財施設のセンター的役割を持たせるとともに、青少年や市民の文化財愛護と杵築の歴史の再認識をねらいとし、観光面や歴史的環境保全の中核として、地域の活性化を目的としている。

きつき城下町資料館は、瓦ぶきの和風建築（鉄筋コンクリート三階建）で、国宝級の文化財が展示できるよう設計されており、総事業費は約八億四〇〇〇万円で平成五年（一九九三）五月に開館した。

展示物としては、城下町杵築を模型で復元したジオラマ、

町人・武士の文化、偉人・

先哲の紹介などを常設展示し、他に年二回の企画展を行っている。また、旧市役所前の一松会館を資料館の隣に移築し、一松定吉氏の遺徳を偲ぶとともに一松邸と改名のうえ、平成十三年より公開している。その庭からは

遠く四国を望み守江湾と杵築城、八坂川河口が展望できる。

## 2 杵築城

### ◆杵築（木村）城の歴史

建長二年（一二五〇）、大友氏二代親秀の六男親重が、鎌倉幕府から豊後国速見郡武者所として三千五百貫をうけ、八坂歴代の郷木村の庄に封ぜられ、鴨川に竹ノ尾城を築いた。これが杵築（木村）城の起源といえよう。

木村氏当主

- ① 親重
- ② 能重
- ③ 貞重
- ④ 頼直
- ⑤ 親直
- ⑥



きつき城下町資料館（H 26. 11. 16）

親公―

⑦ 能世―⑧ 直忠―⑨ 親忠―⑩ 親貞―⑪ 親久―⑫ 親家―

⑬ 親実―⑭ 親諸―⑮ 鎮秀―⑯ 鎮直―⑰ 統直

木村氏四代頼直は、時勢の変遷や港湾の埋没などの理由により、城移転の必要性を感じ、海をめぐらし断崖絶壁で、要塞堅固な城山（杵築城の現在地）に決め、応永元年（一三九四）に竣工し、これに移り木村城と称した。城が台上にあるので台山城ともいい、地形が牛の臥した姿に似ているので、臥牛城ともいった。

頼直には、豊姫という容姿艶麗の姫があった。中傷のため安岐城主田原頼泰との婚約が破れたのを悲しみ、夜半とどろきの淵に身を投じた。父頼直はこれを憐れみ、とどろきと竹の尾の窟に石地藏尊を祀り、冥福を祈ったといわれている。この哀切不憫の想いも、移転の一因となったのではないだろうか。

時代は戦国の世へと移り、六代親公、七代能世、十二代親家、十三代親実、十五代鎮秀はそれぞれの戦いで討ち死にしているが、十六代鎮直の天正十四年（一五八六）十二月、島津軍二五〇〇人の猛攻をうけたが、防戦の末、敵を破り勝ど

きを挙げた。この勝利によって勝山城という別名が生まれた。

第十七代統直は、豊臣秀吉の朝鮮出兵の時、宗家の大友義統に従って長子直清とともに出陣した。大友勢は鳳山に布陣していたが、敵の大軍を見て後方に移動した。このことを知った小西行長が秀吉に「義統は一戦もせず、城を捨てて逃げた」と報告した。秀吉は激怒して、義統の領土を没収し毛利輝元にお預けとした。これに従う統直は、鳳山の戦で嫡子直清を失い、今また宗家大友除国となり、恨みをのんで帰途についたが、門司の瀬戸で自刃入水した。

この悲報が木村城の父鎮直に届き、鎮直夫妻はそろって自害した。時に文禄二年（一五九三）六月であった。ここで十七代、三四四年間統治の木付氏は滅亡したのである。

その後太閤検地が行われ、文禄四年には寺社奉行の前田徳善院玄以に木村が与えられたが、玄以は五奉行の一人なるが故に、代官を派遣した。

慶長元年（一五九六）には、杉原長房が近江（滋賀県）より三万石をもって入部した。長房は城山の木付城が、風当たりが強いこと、海が浅くなったこと、また戦術の変化などの理由をもって、城を北麓の平地に移転しはじめた。

慶長四年、丹後（京都府）田辺城主細川忠興の所領に加え

られ、家臣松井康之と有吉立行が城代として入城した。同五年、関が原の戦いが始まったが、豊後の城主で東軍方は木村城だけであった。領地没収の憂き目にあった大友義統は、毛利輝元に口説かれて、失地回復のため西軍方となり、吉弘統幸に木付城を攻めさせた。しかし城代松井・有吉はよくこれを防ぎ撃退した。

徳川家康は天下統一後、豊後の国を七人で配分したが、木村城だけはそのままだった。この後の一国一城の令により、木村城の天守櫓を取り除いたという。細川忠興は軍功により、三九万石となり豊前小倉（当初は中津）に転封となった。

細川氏の肥後（熊本）への転封の後の木村城主は小笠原忠知が配された。そして正保二年（一六四五）には、能見松平氏七代松平英親が、三万七〇〇〇石（後父重直の遺志により、二男重長に三〇〇〇石、三男重政に二〇〇〇石を分知した。よって三万二〇〇〇石となる）をもって入部した。以来明治四年廃藩に至るまで、十代二二七年間の松平氏の統治が続いた。

歴代の松平氏の藩主

- ① 英親―② 重栄―③ 重休―④ 頼純―⑤ 親盈―⑥ 親貞―

- ⑦ 親賢―⑧ 親明―⑨ 親良―⑩ 親貴

松平氏は徳川幕府と、祖先を同じくしている譜代大名であり、代々名君が相つぎ、蒲民を憐れみ、殖産興業に功績を遺し、また文武にわたり多くの偉人を輩出している。

初代英親は歴代中特に優れた藩主であり、治績をあげ藩の基礎を確立している。英親の時、杉原長房が着手した城の移転が完了し、平城（現在の杵築中学校の位置）となった。十代親貴の明治四年（一八七一）廃藩となり、松平英親入城以來二二七年、木村親重入封より六二二年間の杵築（木付）城は、姿を消したのである。

#### ◆ 杵築城復元の経過

六二二年の歴史を有する杵築城の復元は、心ある者の多年にわたる願望であったが、なかなかその機に至らなかった。この容易ならぬ復元の大事業を堅く決意し一念発起したのが初代市長八坂善一郎であった。

八坂市長は、杵築市の象徴となる城の復元をはかり、郷土博物館を併置して、城下町杵築の文化遺産を保存・顕彰し、教育・観光両行政の一環となし、格調高い市勢の進展を期すことを目的としていた。市長のこの熱意によって、急速に気

運は動き、いよいよ実現を目指して踏み出すこととなった。

昭和四十四年（一九六九）一月、「杵築城復元準備委員会」をつくり、協議の結果同年二月一日「杵築城復元期成同盟会」を結成した。そして約一〇〇名の役員を委嘱し二九名の建設委員を選任した。

また、事務局を商工水産観光課に置き、復元に要する費用は、全額寄付金をもって充てることとし、杵築城復元趣意書・あいさつ状などを作成して、募金準備にかかった。

こうしていよいよ募金活動に入り二月十四日の八坂地区をはじめとして、順次北杵築、奈狩江、大内、杵築と地区区長会を開き、市長並びに係員が出向き、趣旨を説明し絶大なる協力を要請した。

二月二十一、二十八日には東京、四月四日は京都、十三日は大阪において、在京、在関の知名士を招待し、市長より協力を要請した。

このころより、市内の一部に、城の復元に反対する者もあり、「杵築城復元反対市民会議」なるものをつくり、市内外に向けて反対運動をおこし、募金活動の妨げになったことも事実であった。

しかし、ほぼ一か年にわたっての市長を中心とする、市内外の多くの人の努力が実を結び、三千有余名の方々の協賛が

あり、目標であった五五〇〇万円を達成することができた。

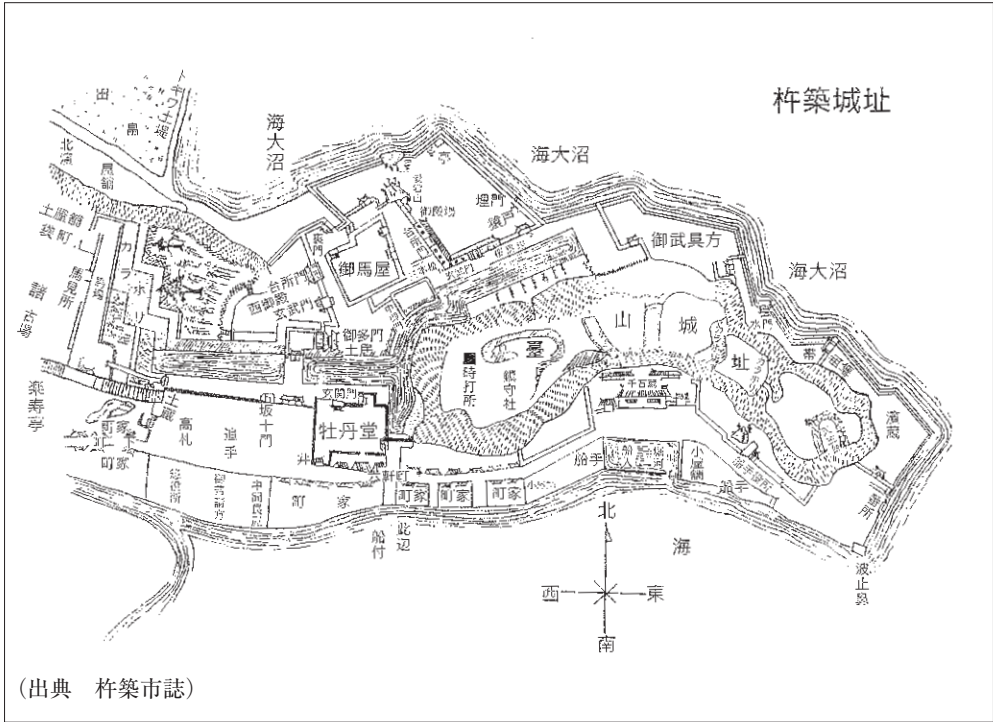
昭和四十四年（一九六九）十一月、市議会でこの復元事業を、市の直営事業にすることを決定し、「杵築城建設特別委員会」がつくられた。

工事については、東京に本社をもつ、株式会社藤田組と契約を結び、昭和四十四年十一月二十三日に起工式が行われた。工事は順調に進み、昭和四十五年七月に完工し、同年十月八日に落成式を挙行了した。

また、城内城外の展示資料蒐集のための委員会を設置、委員を委嘱した。篤志の方からの貴重な文化財の寄贈と出品があり、石造美術品は整備された公園内に、一般資料は城内に展示することとなった。

今では城下町のシンボルとして、多くの観光客の目を楽しませてくれている。

（出典『杵築市誌』）





### 3 ペトロ岐部カスイ

—天正十五年（一五八七）—寛永十六年（一六三九）—  
江戸時代初期の邦人司祭。ペトロは洗礼名、カスイは号。  
国東半島（国見町）の豪族岐部氏の一族。父はロマノ岐部、  
母はマリア波多・長崎・有馬のセミナリオで学び、イエズス  
会の同宿（伝道士）となる。慶長十九（一六一四）年に宣教  
師が国外に追放され、翌元和元年ペトロもマカオへ渡るが、  
司祭叙階への希望を絶たれ、ローマを目指す。インドを経て、  
日本人として初めて聖地エルサレムを訪れた後、同六年ロー  
マへ至る。同年試験を受けてラテラノ教会で司祭に叙階され  
た後、イエズス会入会を許され、聖アンドレア修練院に入る。  
同八年帰国の途につき、マドリード、リスボンを経て寛永元  
（一六二四）年インドに至り、翌年マカオに到着。帰国の機  
会を得るためシャム（タイ）に行き、マニラを経て、同七年  
ルバング島を出発して薩摩の坊津に帰着。長崎から東北に移  
り、迫害下のキリシタンのために働く。同十六年仙台領で捕  
縛され、江戸で穴吊しの拷問にかけられるが、棄教せず殉教  
した。

一、私の名はペトロ・カスイ、父ロマノ岐部と母マリア  
波多の子、当年三十三歳。生まれは日本の豊後の国

浦辺。

二、信心に関して、私は毎日それぞれのロザリオを唱  
え、またほかの聖人たちに他の祈祷をささげ、土曜  
日に大斎を行なうほかは、特別なものはない。

三、入会の動機は、私の自由な決心である。すでに十四  
年前に、自分から進んでそのような願を立てた。そ  
のためには、ポルトガル顧問マスカレニヤス神父作  
の誓願文を使った。

四、身体に関しては、いかなる労苦にでも堪えることが  
できる。

五、神の賜物に関しては、数えきれないほど特別に私  
のため与え給うことを感じている。というのは、数  
多く、かついろいろ異なる労苦と危険から解放されて、  
ようやくイエズス会の修練者に加えてもらったから  
である。

六、自分の召命に満足しており、また自分の救霊および  
同胞のそのために進歩したいというおおきな希望  
をもっている。

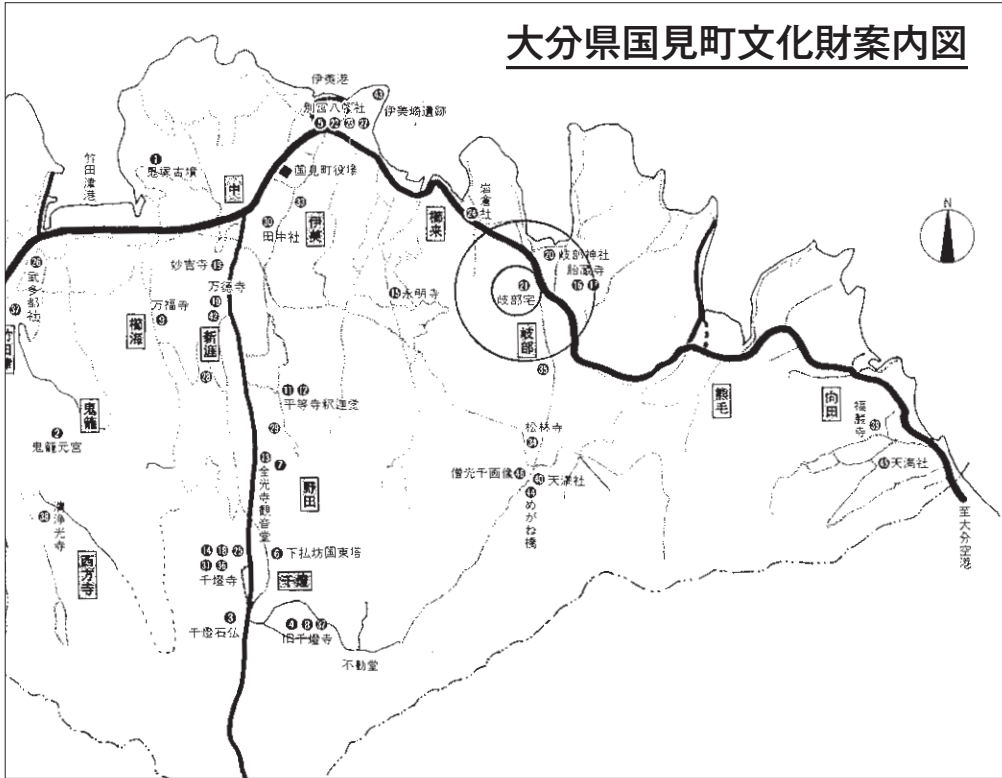
ペトロ・カスイ日本人  
（出典『日本の精華』）

## ペトロ岐部カスイの略年譜

西 暦	年 号	ペトロ岐部 事 項	禁 教 史 (概略)
1587年	天正15年	この頃、父ロマノ岐部 母マリア波多の子として豊後国浦辺に生まれる。	バテレン追放令
1600年	慶長 5年	長崎のイエズス会在中のセミナリオに入る。セミナリオでの教育を終了、同宿となり、同会の仮誓願をたてる。	
1606年	慶長11年		
1612年	慶長17年		幕府直轄領に禁教令
1613年	慶長18年		全国に禁教令
1614年	慶長19年	筑前秋月の、殉教者マティアスの遺体を長崎のイエズス会にもたらず。	宣教師 高山右近らを海外に追放
1615年	元和 元年	長崎より出国する。	
1616年	元和 2年	ローマへゆくためマカオを出立てる。	
1620年	元和 6年	ローマへ到達する。 副助祭、助祭、司祭に叙階される イエズス会への入会を許され、聖アントレア修練院に入る。	
1622年	元和 8年	ローマを発ってリスボンに向かう。 リスボンのイエズス会修練院に学ぶ。	元和の大殉教
1623年	元和 9年	リスボンを発ってインドに向かう。	
1624年	元和10年	インドのゴアに到着する。	イスパニア船来航禁止
1625年	寛永 2年	マニラを経由してマカオに到着する。	
1627年	寛永 4年	マカオよりシャムに向かうが、マラッカ近海でオランダ船に襲われる。 マラッカを出発し、再びシャムに向かう。 シャムの首都アユタヤに到着する。	
1629年	寛永 6年	アユタヤを発ち、マニラに向かう。	
1630年	寛永 7年	マニラを発ち、ルバング島に赴く。 ルバング島を出帆して日本へ渡航する。薩摩国坊津に到着し、長崎へ向かう。	
1633年	寛永10年		奉書船以外の海外渡航
1635年	寛永12年		禁止、日本船の海外渡航、 帰国の全面禁止
1637年	寛永14年		島原の乱
1639年	寛永16年	仙台領の長三郎、ペトロ岐部を寄宿させた三宅藤衛門を訴える。 仙台領で捕われて江戸へ送られる。 拷問を受けるが、背教せず、 殉教する。	
2007年	平成19年	ローマ教皇庁より日本人の殉教者 187名の列福が決定通知あり。	
2008年	平成20年	11月列福式が長崎で行われ、 福者となる。	

(作 佐藤 勝)

# 大分県国見町文化財案内図



国見ふる里展示館 (H26. 11. 16)